

## 「天気」誌の査読に関する所感

河 宮 未知生\*

2008年3月号本欄に、「反論を受け付けない気象学会は『学会』と言えるのか」と題した槌田 敦氏による記事が掲載された(槌田 2008)。槌田氏はそこで、彼自身による投稿論文が掲載拒否になったことが不当であるとして本誌編集委員会を批判している。筆者は、本誌へ投稿した論文が査読を経て掲載になったことも掲載拒否になったこともあり、そうした経験から槌田氏とは若干異なった見解を本誌編集委員会に対して持っているの、この場を借りて述べさせていただきたい。

その前に、査読を経て論文が専門誌に掲載されるまでの一般的なプロセスについて説明しておく。本誌読者の多くは既にご存知かも知れないが、実社会に広く応用される実学としての気象学の性格上、そうしたプロセスに馴染みのない読者も相当数に上ると思われるからだ。まず、公表したい成果が得られた場合、研究者はそれを論文としてまとめ適切な専門誌に投稿する。それを受け取った専門誌の編集委員会は、論文の内容に対して見識をもつ他の研究者2、3名を査読者として選び、掲載に値する内容をもつものかどうかの審査を依頼する。内容に不備がある場合、査読者は著者に修正や場合によっては再実験などを要求することになり、著者はその求めに応ずるか、拒否するならばその理由を述べる。編集委員の仲介の下でこうしたやりとりを繰り返したのち、査読者が掲載を認めれば論文は編集委員会に受理され、修正後もなお致命的欠陥が残っていると判断されれば掲載拒否となる。

このプロセスは気象学のみならず国内外の多くの自然科学分野における専門誌で採用されているものであり、欠点はあるものの掲載される論文の質を保つのに必要であると認識されている。査読の結果、多大な時間と労力を割いて執筆した論文が掲載拒否になるのは

珍しいことではない。中堅以上のキャリアを持つ研究者なら、自分の論文が掲載拒否になった経験がない人の方が少ないのではないかと。筆者の経験で言うと、拒否された当初は憤りも感じるが、少し時間を経て考え直すと、自分自身の側に反省すべき点が見つかる場合も多い。

本誌に即して言えば、「論文」や「短報」「解説」として投稿される原稿には査読が行われる(「天気」編集委員会 2008 a, b)。査読では、論理の積み上げに欠陥はないか、データの品質に問題はないか、事実と反する記述がないかなどの点について、厳しく吟味される。このプロセスに耐えられない原稿は掲載拒否となる。その場合、査読者の意見を参考によほど大幅の改訂を加えて再投稿するのでない限り、同じ専門誌にその原稿が掲載されることはない。査読を経て下した決定を、修正拒否の繰り返しや苦情だけで覆すようなことがあっては、自然科学分野全体の研究の質を維持してきた制度の崩壊につながりかねないからだ。

本欄を含めその他の欄については、査読に準ずる審査が行われることもあるが、基本的には会員相互の情報交換の場である。投稿された内容は、ほぼ原形通りに掲載される場合が多い。

今回の槌田氏の原稿は、文脈から考えて「論文」か「短報」として投稿されたようだ。内容について筆者は詳しく知らないが、彼の著作(例えば、槌田 2006, 2007)などによって大よそ推察することができる。彼の主張については筆者もいくつかコメントを記したことがある(河宮 2005; 明日香ほか 2007)。これらを参考に、読者も査読者になったつもりで精読してみるのも一興かもしれない。

さて恥をさらすようで汗顔の至りではあるが、冒頭でも触れたとおり、筆者も本誌へ投稿した原稿が掲載拒否になったことがある。その内容はいわゆる地球温暖化論を支持するものであった。自分の原稿が掲載拒否になって喜ぶ研究者はいないだろうが、地球温暖化論の支持不支持によって査読の判断が歪められたとは

\* Michio KAWAMIYA, (独) 海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター。

© 2008 日本気象学会

思っていない。人間の営みである以上完璧とは言えないであろうが、本誌の査読プロセスは公正なものだという印象を筆者は持っている。

# 参 考 文 献

明日香壽川, 吉村 純, 増田耕一, 河宮未知生, 江守正多, 野沢 徹, 高橋 潔, 伊勢武史, 2007: 地球温暖化問題懐疑論へのコメント. <http://www.cir.tohoku.ac.jp/~asuka/>, 2007年6月更新, 2008年5月閲覧.  
河宮未知生, 2005: 気温の変化が二酸化炭素の変化に先行するのはなぜ?. 天気, 52, 507-508.

「天気」編集委員会, 2008 a: 査読制度に関する編集委員会の考え方と方針. 天気, 55, 52-53.  
「天気」編集委員会, 2008 b: 「天気」投稿および内容案内. 天気, 55, 73-75.  
植田 敦, 2006: CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている. ほたる出版, 173 pp.  
植田 敦, 2007: CO<sub>2</sub>を削減すれば温暖化は防げるのか. 日本物理学会誌, 62, 115-117.  
植田 敦, 2008: 反論を受け付けけない気象学会は「学会」と言えるのか. 天気, 55, 199.

## 気象研究ノート第218号 「エアロゾルの気候と大気環境への影響」 発刊のお知らせ

気象研究ノート編集委員会

地球温暖化問題は、今や温室効果ガスのみならず、エアロゾルや土地利用など多岐にわたって人間活動との関係が検討されるようになってきました。また、健康被害や植生にも影響するローカルな大気汚染とグローバルな気候変動を結びつけた研究など、エアロゾルの研究は現在進行形で新たな局面を迎えています。

エアロゾルに関する研究手法は、近年、格段の進歩が見られますが、その背景には地上観測、衛星観測、大気輸送モデルの進展と、その融合があります。また、研究分野から見ても、エアロゾルの物理・化学に関する個別の研究が協力して実施されるようになりました。

以上のような状況の下に、我が国のエアロゾル研究とそれを取り巻く研究分野の現状を知っていただきたく、本研究ノートを企画した次第です。研究ノートのシリーズとしてエアロゾルを特集したものは、「エアロゾル特集号-基礎編-」(第142号, 1981年)と「エアロゾル研究-応用編-」(第146号, 1983年)がありますが、その後20年余りの間におけるエアロゾル研究の進展に触れていただければ幸いです。

# 【目次】

- 第1章 エアロゾルの気候影響と研究の課題
- 第2章 有機エアロゾルの組成・分布・生成
- 第3章 人為起源炭素性エアロゾルの生成過程
- 第4章 奄美大島の春季における大気エアロゾルの化学組成と光学特性
- 第5章 エアロゾルなどの広域動態の観測
- 第6章 大気放射観測から見るエアロゾル
- 第7章 アクティブセンシングで見るエアロゾルと雲
- 第8章 衛星観測から見る雲
- 第9章 雲微物理のモデリング
- 第10章 エアロゾルの広域動態と気候影響のモデリング
- 第11章 人間活動とエアロゾル

【編集】中島映至, 早坂忠裕

184ページ, 2008年7月1日発行

【価格】会員: 2,800円, 会員外: 4,100円